

造形教育における美術鑑賞の指導法 (1)

—「学校美術館」のプランニング—

Teaching Method of Art Appreciation in Art Education (1)

—Planning of “School Art Museum”—

辻 泰 秀

TSUJI Yasuhide

(岐阜大学)

水 谷 誠 孝

MIZUTANI Nobutaka

(名古屋学芸大学)

1. はじめに

図画工作・美術科をめぐる近年の動向として、鑑賞教育の内容や方法に関する実践研究が着目されている。教育現場の教科の研究主題や学会発表でも、鑑賞教育に属するものが量的にも質的にも目立つようになってきた。これまでの学習指導要領において、表現と鑑賞の二つの領域が設けられているにもかかわらず、描く・つくるといった表現活動が中心として取り扱われ、作品鑑賞等の鑑賞領域の指導が十分に行われてこなかったことが、鑑賞に目を向ける背景になっている。どの学年の子どもたちが、どのような作品を鑑賞するのが望ましいか、どのように鑑賞活動を展開していったらよいかを、教育実践を通して確かめることが望まれる。

たとえば、画集等の図版によって作品を示すだけでは、本来の鑑賞の学習にはならない。子どもたちが作品について語り合う、比較しながら造形的な工夫を分析する、何が表現されているのかを解釈するといった、子どもの思考力や表現力にかかわる教育活動が展開される必要がある。また、一斉指導による知識の注入の弊害が顕著になり、子どもたちが意見を交流しながら主体的に学び合う言語活動が全教科にわたって重視される傾向がある。すなわち、学校現場においても、アクティブ・ラーニングを位置付けるべきであることが共通理解されているとあってよい。今後は、図工・美術科においても、美術作品を見て気づいたことや感想を述べ合い、その表現内容や技法について体験的に理解を深めるような学習が多くなるものと推察される。

生涯学習時代への対応として、学習指導要領において、美術館の活用や、学校と美術館との連携についても提案されている。その方向性には賛成する教育関係者が多数であるにもかかわらず、実際に美術館に行って作品鑑賞をする、美術館スタッフによる作品鑑賞の機会をもつ、といった事例は限られている。美術館が近くにない、時間や費用がかかりすぎる、美術館での鑑賞学習の方法がよくわからないといった理由からである。

本稿で取り上げる「学校美術館」では、アーティストが学校に作品を展示するとともに、ギャラリー・トーク（鑑賞教室）を通して、作品について対話をする。作品の見方には、一つだけの正解といったものは存在しない。いろいろな作品の見方や解釈が可能である。子どもたちが作品から気づいたことや感じ取ったことを話し、アーティストと子ども、子どもたち相互での対話になることを意図している。「学校美術館」においてギャラリー・トークを位置付けることによって、鑑賞活動の内容や方法の明確化、図工・美術科における言語活動の導入、学校と美術館との連携といった今日的課題について、一つの解決策を示すことになると考える。

2. 「学校美術館」の特徴

「学校美術館」は、学校と美術館という異なる教育施設を結び付けた造語である。学校に美術館のように作品を展示することで、学校の教育環境を変えたり、子どもたちが普段できないような美術の体験をすることをねらっている。主な特徴は、次の(1)から(3)にまとめることができる。

(1) 本物の作品を鑑賞する《直接経験》

印刷や映像の技術の進歩によって、美術作品のもつ色彩や質感等をよりリアルに再現することが可能になった。画集等のカラー印刷の図版では、色彩やタッチの細部までよくわかるようになってきている。テレビ画面や液晶プロジェクターによる鑑賞では、動画や音声の効果も期待できる。また、インターネットを使って、必要な作品の画像を検索して鑑賞する教育活動も取り入れられている。

このように複製技術の向上によって美術鑑賞をする環境は良好になっていることは確かであるが、音楽の生演奏がCD等よりも好まれるように、本物の美術作品を鑑賞することは有意義である。たとえば、作品の大きさは、目前にあると的確にわかるが、作品集では実感がつかめない。立体作品では、量感や奥行き、作品が置かれている環境、デコボコやツルツルといった表面の感触等が大切な要素になっているが、写真画像ではどうしても平面的な理解にとどまりやすい。平面作品でも、画面の素材感(テクスチャー)や筆跡(タッチ)は、直接よく見たり触れることによって、手に取るようにわかる。アーティストは、素材感や大きさを意識して制作に取り組んでいるが、本物を見ることによってアーティストの工夫、作品のもつ魅力を理解できるはずである。

「学校美術館」では、アーティストが作品に手で触れることを提案する場合がある。手で触れると、材料の表面の感触や、量感などがわかる。彫刻でも、土・木・石など、材料によって手で触れたときの感覚が異なるので、材料の特徴を知ることにつながる。また、手でふれているうちに、生命力を感じることもできるかもしれない。生きものをモチーフにした作品になでるようにして触れる、人物の顔の作品のほほに触れることで、生きものや人への感情が伝わる気がする。子どもたちが本物の作品に接して、視覚と触覚の双方を使って作品のもつ魅力を感じ取ることに於いて、「学校美術館」はよい鑑賞の機会になると考える。

(2) アーティストと対話する《ギャラリー・トーク》

美術作品には、表現内容(主題)や技法上の工夫があるはずである。それらは、すぐにわかるものと、作品の中に隠された状態になっており、気づかないものも多い。実際にその作品を制作した作者と会話をする中で、作品に込められた思いや工夫が理解しやすくなる。

研究者の中には哲学的な論文や、数値や記号を複雑に組み合わせた論文を作成する人がいて、一般の人はもちろん専門家の間でも容易には理解できないことがある。ところが、実際に研究者と会って親しく話をしているうちに、話し方や人柄から、研究の内容や方法が手に取るようにわかるようになる経験をすることがある。同様に、美術作品の場合にも、「何が表現されているか」「どのようにつくったのか」といったことがわからない作品もあるが、制作者であるアーティストと話をしているうちに、意図が伝わることもある。

一方、アーティストも、作品を通して鑑賞者に何かを伝えたいという思いがある。美術館に展示するときには、作品の搬出と搬入に立ち会い、実際に鑑賞者と話をする機会は意外に少ない。学校美術館では、鑑賞教室として小学生や中学生と対話をする時間が設けられているので、自分自身で作品や制作経験について語るができる機会となる。とりわけ、小・中学生の年代は知的好奇心が旺盛で、表情や動作を示したり、素直に感想を述べることが多いので、アーティストにとっても有益である。

(3) アーティストと追体験する《ワークショップ》

「学校美術館」では、作品を展示し、期間中にアーティストによるギャラリー・トークが行われる。時間的なゆとりがあるときには、ギャラリー・トークに加えて、アーティストによる造形ワークショップも行われる。作品を見るだけでなく、実際に制作体験もする。

材料にはたらきかけながら描く・つくる活動をすることで、完成作品をみただけでは十分にわからない表現上の工夫や制作の魅力の理解につながる。アーティストは、自分の思いをどのように色や形として表現しようか、日々試行錯誤を重ねている。アーティストは制作上の工夫や苦心について体験しているので、子どもたちへの支援にも応じることができるはずである。子どもたちは、造形活動を伴う交流を通して、材料や用具、発想の方法、制作方法などについて知ることによって、より深く作品に親しむ。

現在、各教科において、能動的な学習としてのアクティブ・ラーニングが着目されている。アーティストによる作品説明は、場合によっては、一方向からの伝達になってしまうことがあるが、造形活動も取り入れることによって、表現と鑑賞との連携や、意欲的な学習への展開が可能になる。

3. 学校美術館の経緯

これまで5年間の「学校美術館」の開催は、次のようである。

平成24年度 飛島村立飛島学園（飛島小・中）

25年度 岐阜市立藍川北中・藍川小，美濃市立藍見小，弥富市立十四山東部小

26年度 岐阜市立藍川北中・藍川小，美濃市立藍見小，弥富市立十四山東部小

27年度 岐阜市立藍川北中・藍川小，岐阜市立岐阜中央中，弥富市立十四山東部小

28年度 笠松町立笠松小学校，本巣市立本巣中学校・本巣小学校，弥富市立十四山東部小，
江南市立宮田小学校

愛知県飛島村立飛島学園が小・中の一貫校として校舎を新築し、恵まれた教育環境で、「学校美術館」として作品を展示するのにふさわしい状態であったことについては、既に報告をした¹⁾。

次の年に岐阜市立藍川北中学校から美術作品の展示について相談を受けた。藍川北中学校の主な校区は、昭和の時代に造成された加野団地である。高度経済成長の頃に、全国各地で団地、ニュータウンと呼ばれる住宅地がつくられた。一斉に入居し学校校舎を増築した当時は、児童・生徒数は多く、学校としても比較的新しかった。ところが、住民が既に退職された世代になるにつれて児童・生徒数が減り、普段使用していない教室が多くなってきた。そのような学校や地域への活性化の一つとして「学校美術館」が発案された。そして、藍川北中学校の生徒とともに、隣接する藍川小学校の児童もギャラリー・トークに参加することになった。また、美濃市立藍見小学校は、岐阜県の中濃地域にあり、岐阜市とは異なる地域になるので、教育活動の広がりということから実施することになった。

愛知県の弥富市立十四山東部小学校は、名古屋市の西に位置しており、第1回の学校美術館が開催された飛島小・中学校と同じ地域であるといってもよい。飛島小・中学校は、展示できるスペースが広く、すばらしい教育環境をもつ学校である。ただし、優れた環境でしか「学校美術館」を実施できないというわけではなく、工夫次第で通常の学校でも実施が可能であることが望まれる。おりしも、当時の星教頭が図画工作科で、その後、後任として飛島小・中学校から同じく図画工作科の浅尾教頭が転任されたので、「学校美術館」の運営ができるようになった。

28年度に藍川北中学校が道徳の研究指定を受け、それに向けた取り組みが学校美術館開催の時期と重なり、既に3年間同じ学校で行ったことにもなるので、本年度、実施可能な学校をさがすことになった。おりしも岐阜県教育委員会の清水也人指導主事から、笠松小学校での開催を提案されたこともあ

り、具体的な企画を立ち上げた。笠松小学校でも児童数の減少が顕著になり、3階建てである北舎の教室のほとんどが使用されていないという情報があり、学校へ「学校美術館」の打診をしたところ、開催が決まった。近藤栄美子校長が以前岐阜大学附属小学校や県の教育委員会に勤務されていたことがあり、大学等との共同研究や開かれた学校づくりについて積極的であったこと、図画工作科の村川千賀子教諭も岐阜県の図画工作科研究部会で研究実績のある方であったことも幸いであった。

美濃市の藍見小学校も数年間続いたので、岐阜市近郊での開催校をさがしていたところ、本巣市立本巣中学校が候補になった。たまたま本年度から本巣小学校の河合延佳教頭が「学校美術館」のスタッフとして加わることになり、本巣小に隣接し、近年改築した校舎をもつ本巣中学校に伺ったところ、承諾していただいた。本巣中学校で展示することで、隣接する本巣小学校の子どもたちもギャラリー・トークに参加できる。本巣中学校の校舎は改築後それほど年数がたっておらず、作品の展示スペースは、体育施設に隣接する多目的ホールになった。ホールは6教室を合わせたくらいの広いスペースであり、通常の教室とは異なる雰囲気である。新しく広いことは、好条件ではあるが、社会教育が公民館として管理しているので、行事が重なると作品を常時展示することができないことが難点であった。以上のような経緯で、28年度の「学校美術館」の実践が始まった。

4. 「学校美術館」の企画と準備

(1) 準備物

「学校美術館」の準備及び準備物としては、作品展示できるスペース、各アーティストの作品、作品を展示する台・机・イーゼル・ロッカー等、ヒートンのように壁面や天井に展示できる金具、作者や作品名を記したキャプションである。搬入・搬出時には、ダンボールや毛布などで作品を包むようにする。石や木でできた重い作品の場合には、台車が必要である。

ギャラリー・トークに際して、アーティストや作品の紹介資料、メモをとるようなワークシートを作成するのも一つの方法である。子どもたちのワークシートは、鑑賞学習の記録が残るという点ではよいが、記入することに時間や関心がある。せっかく本物の作品が目前にあり、アーティストが話しかけているので、ギャラリー・トークの間は、作品を見ることやアーティストとの対話に集中する方がよいように見受けられる。

アーティストが作品の材料や制作過程について説明する際には、絵の具・石・木・土をはじめとした材料や、筆・パレット・ノミ・金鋸をはじめとした用具を持参することになる。また、鑑賞に加えて造形の追体験をする場合には、それに伴う材料・用具を子どもたちが活動をしやすい数量を準備する。絵画作品を見てその場で描画体験もする、粘土を使って陶芸作品の制作の過程を追体験する、といった場合には、その造形活動ができる材料・用具を準備する。

(2) 実施に伴う条件整備

① 作品の展示場所「空間」

学校美術館を実施するにあたって条件となっているのは、作品を展示する場所やギャラリー・トークのできる空間があることである。近年、各地の学校で児童・生徒数が減少しておりクラス数も減っている。そのため、いわゆる空き教室が増え、作品を展示する教室スペースを確保しやすい。全く空き教室でなくても、児童会室・生活科室・小学校英語教室・小人数教室等を一か月ほどお借りすることでも、作品展示が可能である。学校の教室のスペースは街の中心部のギャラリーと比べるとかなり広く、子どもたちが床に座ったり、アーティストとギャラリー・トークをするようなスペースをとりやすい。配慮すべきなのは、展示用の台と太陽光である。展示する際には、作品を置く台があるが、そのつど持ち込むのは大変である。子どもたちが使っていた机があれば好都合である。学校の場合に

は南向きの教室が多く、普段カーテンがないと、直接作品に太陽光があたるままになる。紙、ビニール、木などの材料でできた作品の場合には、変形・退色・劣化につながりやすいので留意する。

比較的新しい校舎をもつ学校では、あらかじめ多目的スペースとして教室と廊下の壁をなくして、広く使えるようになっている。教室に限らなくても、廊下や階段のスペースに余裕があり、廊下・階段・ピロティーを活用する方法もある。普段見慣れた場所が、美術作品を展示することによって変わるという体験をすることになる。

美術館から離れた場所にあり、子どもたちが本物の作品を見ることができないような学校に出前することに意味はある。そのような遠方の学校ならば少子化のために展示スペースも確保しやすいように見受けられる。ただし、「学校美術館」を実施するためには、会場の下見と打ち合せ、搬入及び展示、鑑賞教室、搬出等で1学校あたり4回ほど往復することになる。アーティストは、通常は大学・短期大学、美術館、学校等に勤務されており、普通日に搬出・搬入や鑑賞教室のための時間を調整することが大変であり、さらに遠方で実践するには、運用上の工夫がいる。

学校美術館として使用できるスペースがあることに加えて、教室の配置や使用状況も条件になる。授業でギャラリー・トークをする際に、離れた教室を移動するよりも、隣接した教室の方が便利である。45分や50分内で各教室を移動する際に10分くらいの時間を有効に使える。また、作品の設置には、意外と時間と労力を必要とする。期間中そのまま展示できるならば好都合であるが、週何回か生活科・総合学習・小学校英語・音楽会の練習・会議等で使用するといった場合が出てくる。公民館行事で使うため、その都度展示をし直す場合もある。あらかじめ、学校等と相談をして、学校美術館の期間中はできるだけ作品移動をしなくても済むようする、2～3週間程は展示期間をとれるようにする、いろいろな学年・学級もリクエストに応じて鑑賞活動が可能ないようにカリキュラム上の工夫をする、といった配慮をしたい。

② 人的な環境

条件として、人的な環境も大切になってくる。学校美術館では、作品の出前をしてより多くの人に鑑賞してもらいたい。とくに鑑賞教室の実施の際に、校長先生をはじめ教職員の協力が求められる。スペースの確保、時間割の変更、子どもたちの移動等、鑑賞の機会の充実のために教職員が「学校美術館」の目的や利点を理解していて、実施しやすいように協力する必要がある。図工・美術教師の協力はもちろん、管理職や学級担任の支援がないと、十分な活動ができない。はじめはそれほどでもないが、実施するにしたがって、教職員や子どもたちの興味が高まることもあるので、作品展示や鑑賞教室についての啓発が望まれる。子どもたちの意欲的な活動や熱心に取り組むアーティストたちの姿を見て、理解や協力が深まることが多い。学校の教職員に加えて保護者や地域住民の参加も望まれる。たとえば飛鳥小・中学校、藍川北中学校等では、学校美術館の展示期間中に、PTA参観や個人懇談があり、保護者の方も作品鑑賞ができるようになっていた。校長会の会場、教育委員会の視察、市長の訪問の機会と重なり、特色ある学校行事や学校施設の活用の事例として地域や教育関係者の注目を集めたこともあった。

5. リーフレットの作成 —アーティストと作品の紹介—

次に、28年度の「学校美術館」用に作成した資料（リーフレットの原案）を示す。アーティストや作品を概観すると、絵画・彫刻・デザイン・工芸の各分野に広がり、具象と抽象、現代と伝統、西洋と日本といったように多様な美術作品を展示している。すなわち、子どもたちが、いろいろな作風や材料の美術作品に出会い、ギャラリー・トークを実施できる状態になっているといえる。



学校美術館

2016年10月17日(月)～11月4日(金) 笠松町立笠松小学校

2016年11月14日(月)～11月25日(金) 本巣市立本巣中学校・本巣市立本巣小学校

2016年12月5日(月)～12月16日(金) 弥富市立十四山東部小学校

2017年2月6日(月)～2月28日(火) 江南市立宮田小学校

※会期中に出品作家によるギャラリートークを開催

企画・運営 学校美術館実行委員会





浅野秀男 石彫

東海学院大学講師
岐阜大学大学院修了。東京、名古屋、岐阜をはじめ各地で彫刻の作品展を開催する。本来重く硬いものである石を、曲線や厚みを工夫しながら加工することで、浮遊しているように見せている作品が多い。作品や制作への自己の追究姿勢は厳しいが、子どもたちへの語り口はやさしい。



家田陽介 抽象

関市立桜ヶ丘小学校長
岐阜大学教育学部美術工芸学科卒業。美濃和紙の産地として古くから有名な岐阜県美濃市に生まれ育つ。油彩による抽象画を描いてきたが、最近では、美濃和紙によるインスタレーションを手がけたり、本美濃紙や染色した和紙に、風のイメージ、黎明の風景などを描いたりする活動が多く見られるようになった。



江村和彦 陶芸

日本福祉大学准教授
愛知教育大学大学院修了。常滑市、三重県伊賀での陶芸修行の後独立。伝統的な陶芸の技法を用いた美しいお皿やうつわを制作する一方、ロボットや怪獣をモチーフとした新しい陶芸の分野を開拓している。その表現の意図や魅力を子どもたちに興味深く伝えている。



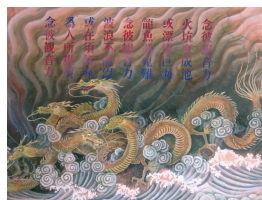
桂川成美 版画

岐阜聖徳学園大学教育学部専任講師
愛知県立芸術大学大学院修了。日本版画協会会員。日本版画協会展新人賞、山本鼎版画大賞展準大賞受賞。ビルなどの街の景色などをモチーフにして、写真やコラージュ技法を活用した繊細な版画の表現をしている。優しい人柄が伝わるギャラリートークが期待できる。



加藤司 イラストレーション

岐阜大学大学院教育学研究科
芸術身体表現コース在籍。リアリティーのある架空の生物を制作。生きいきとした生物を描くために、骨格や生態など、見えない所まで設定している。また細かな描写は、実在の生物の観察をもとに行われている。想像上の生物を描くことは幼い頃から好きであり、トークでは童心を忘れない制作姿勢を語る。



河合延佳 デザイン

本巣市立本巣小学校教頭
優雅さと繊細さを合わせた平面デザインの作品を描く。小・中学校や岐阜県美術館での勤務の経験を生かした情熱的な作品解説は、的確でわかりやすい。



近藤安由美 木工

日本福祉大学非常勤講師
木のおもちゃのデザインと制作を行う。見るだけでなく、手で触れたり音を出して楽しむことができる。手づくりのおもちゃを通して、子どもたちへのやさしさや、ものづくりへの遊び心が伝わってくる。



辻泰秀 インスタレーション

岐阜大学教育学部教授
大阪教育大学大学院修了。福島や宮城をはじめ全国で造形ワークショップの実践を行う。造形によるコラボレーションや交流を推進する。パラソルプロジェクト、リレー版画等の全国的な造形教育プロジェクトを展開している。5年目になるこの学校美術館の発起人である。



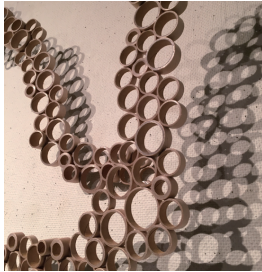
永江智尚 彫刻

愛知教育大学講師
筑波大学大学院修了。2008 日彫展日彫賞、2013 年白日展白日賞、2014 日彫展優秀賞、2014 年東海日彫展中日賞他受賞多数。人物を主なモチーフにして、粘土や石膏で具象彫刻を制作する。確かな写実性とモチーフへの思い入れがあり、それらが鑑賞者の心を引き付け、高い評価を受けている。



新實広記 ガラス工芸

愛知東邦大学准教授
愛知教育大学大学院修了。いろいろな形や色をしたガラス工芸の大きな作品を制作している。原材料やガラスを膨らます用具をギャラリートークに持ち込み、材料や制作方法について動作を交えて説明している。作品だけでなく制作過程での工夫やガラス工芸への思いも語られる。



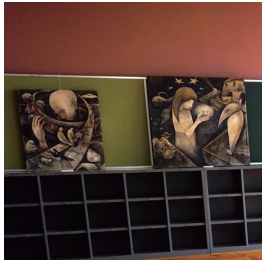
西村志磨 インスタレーション

修文大学短期大学部准教授
愛知教育大学大学院修了。子ども向けワークショップ等を通し、子どもと造形教育のあり方を模索する。自然素材から廃品まで様々な素材を使った作品展開を考える。学校美術館では、カバン用ロッカー、窓、教室の床、出入り口などのスペースに、いろいろな材料で制作したオブジェを設置し、見慣れた風景を変える試みをしている。



早矢仕晶子 抽象彫刻

岐阜聖徳学園大学教育学部教授
東京芸術大学大学院修了。岐阜県美術館での源流展に毎年出品する。木をノミなどで彫って形をつくり、白色で彩色した抽象彫刻を制作している。木のもつ立体感や素材感をいかしながら、他の素材を取り入れたオブジェも試みる。親切な説明によって、現代彫刻の見方が理解できそうである。



林隆一 具象絵画

岐阜県美術館課長補佐
画面に螺旋形の構図を導入するなど、新たな具象絵画を切り開いている。描画材料もアクリル絵の具を使用しながらコーヒーを活用するなど、ミクストメディアを取り入れる。中学校の教育現場から岐阜県美術館の教育普及担当に移動してから、学校と美術館の連携、ギャラリートークやワークショップのスペシャリストとして活躍している。



廣瀬敏史 抽象彫刻

東海学院大学准教授
東京芸術大学卒業後、ドイツに留学し修士の学位を取得。平成 22 年に文化庁新進芸術家海外派遣によりドイツのベルリンで屋外彫刻の研究を行う。ドイツと日本において、かための発泡スチロールとアクリル樹脂による立体作品、木版画、切り絵などを制作する。



福井清治 石彫

岐阜県美術館学芸部課長補佐
岐阜大学教育学部美術工芸学卒業。石を彫る・削る・磨くことのみ重ねによって、立体的な作品を制作している。現在、岐阜県美術館の教育普及のチーフとして、ふれあい鑑賞教室等の運営をしている。小・中学校での教職経験が豊かで、子どもの発見を引き出すようなトークを展開する。



藤田雅也 石彫

静岡県立大学短期大学部准教授
愛知教育大学大学院修了。2006 年瀬戸市美術展大賞 2009 年行動展建島賞造賞、2011 行動展行動美術賞。各地にパブリックアートの作品を設置する。石のゴツゴツした部分とツルツルに磨いた部分との対比によって石の質感を表現している。道具をもち動作を交えた作品説明が魅力的である。



堀祥子 具象彫刻

名古屋女子大学文学部専任講師
岐阜大学大学院修了。人物などを具象的に表現した立体作品を発表している。粘土で成形した後に焼成し、淡い色調で彩色している。わかりやすいギャラリートークを行い、学校美術館のいろいろな作品について、子どもたちと対話をしながら、作品のねらいや工夫を丁寧に伝えている。染色などの工芸的なワークショップにも取り組む。



松下明生 日本画

名古屋柳城短期大学准教授
愛知県立芸術大学大学院修了。院展出品。名古屋松坂屋などで個展を開催する。伝統的な日本画の画材や技法を用いながらも、都会の風景や海外の街などをモチーフにして、新たな日本画の世界を展開している。細密な技法で、夕暮れや夜の月明かりの情景を表現している作品が多い。



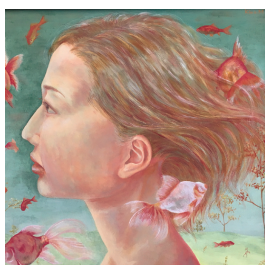
望月鮎佳 彫刻

岐阜大学大学院教育学研究科芸術身体表現コース在籍。第68回岐阜市美術展市長賞、第69回岐阜県美術展県展賞、第69回岐阜市美術展市展賞、2016年岐阜大学医学部付属病院彫塑作品個展「躍動する命」。粘土を使った塑像から、木彫など幅広い分野で命をかたどっていく。大胆な造形表現が持ち味で、原寸大の馬や力士の筋骨から伝わるダイナミズムは圧巻。



水谷誠孝 テンペラ画

名古屋学芸大学専任講師
愛知県立芸術大学大学院修了。国画会所属。2009年中部国画賞受賞、2011・2014年国展絵画部奨励賞受賞、松坂屋本店などで個展・グループ展多数。メリーゴランドや風船があるような想像の世界を西洋の伝統的なテンペラ技法で写実的に表現する。ギャラリートークでは、卵とテンペラ画の材料・用具を準備し、やさしい口調で語りかけている。



箕浦希生 テンペラ画

岐阜大学4年生在学中
水泳部で鍛えた体力で、油絵やテンペラ画を制作する。笠松小学校出身で、母校での作品展示やトークに意欲を示す。公募展での入賞を通して大学院での飛躍が期待できる。



山田唯仁 油彩画

岐阜大学大学院教育学研究科芸術身体表現コース在籍。心象風景をテーマに油彩画の制作をしている。画面に様々なモチーフを配置し、不思議な世界観を表現する。また光を意識した強いコントラストによる明暗表現が目目を惹きつける。ギャラリートークでは、実際に使用している自身の制作道具を持ち寄り、子どもに触れてもらうなどの体験的な交流も試みる。

学校美術館の多様性

学校美術館は、学校と美術館という異なる施設を結び付けた造語です。明治時代以降140年余の美術教育の歴史の中で、近年の20～30年間に使われるようになった言葉です。学校では子どもたちの声が聴こえ子どもたちが運動場や体育館で走り回って遊んでいる姿をよく見ますし、美術館に行くこととひとっそりとした落ち着いた雰囲気の中でじっと作品を鑑賞している光景が目につきます。このように、学校と美術館は、動的と静的、歓声と静寂といった対象的な印象を示していますが、学校美術館として、学校と美術館を一体化し、より多様な教育の機会をもととしています。ただし、学校美術館という同様の言葉でも、その内容や方法は異なっています。展示する作品は、今回のようにアーティストの本物の作品、図工や美術の授業で制作された子どもたちの作品、画集などのような複製画、といったように多様です。場所・規模・展示期間などについても学校によって状況が異なります。また、美術館の作品を移動して出前の鑑賞教室を実施するときや、少子化や学校の統廃合によって生じた空き教室や施設を美術館にして活用する事例もあります。いずれかが正解というわけではなく、学校美術館には、それぞれの形態や方法があるはずです。いろいろな作品やアーティストと出会うことによって、子どもたちの見方・考え方が広がることを期待しています。

学校美術館実行委員会 代表 辻 泰秀

6. まとめ

この「学校美術館」では、アーティストが学校に作品を展示するとともに、鑑賞教室等も実施する方法をとっている。「学校美術館」という同じ名称を用いている例としては、学校に子どもたちの作品や名画の複製画を多数展示する事例、廃校や学校の空き教室を活用して作品を展示する事例、美術館が所蔵作品を学校に出前をして展示するとともに鑑賞教室を実施する事例等がある²⁾。

アーティストが学校に出前をする方法については、従来までにすぐれた先行実践があるが、継続する状態にはならなかった。美術科の教諭や学校長が企画・運営の中心になる必要があるが、主な担当者が数年のうちに移動・転出したために、継続できなくなったという状況がある。あるいは、正式に学校に美術作品を展示し地域住民も参加しようとする、公的な施設を借りて地域開放することになるので、手続きや運営が煩雑になるといった理由もあった。美術館の所蔵作品の出前に際しても、美術作品の運搬や保険等に経費がかかるため、美術館の予算削減とともに縮小傾向にある。

本稿で取り上げた「学校美術館」では、作品展示や鑑賞教室の実施は、アーティストの教育ボランティアを基本としているので、経費的な課題はそれほど話題に出ない。作品の破損等についても、移動や鑑賞教室の際に生じるもので、想定内におさまっている。立体作品の台座が安定していなかったり、ガラスや和紙のように破損しやすい材質の作品である場合があるが、作品を大切にしなければいけないといった鑑賞のマナーが、子どもたちに自然のうちに存在している状況が伝わってくる。

確かに学校との連携、アーティスト相互の連絡、搬入や搬出に伴う時間や労力、鑑賞教室の準備や実践、ギャラリー・トークの運営方法等、いろいろと取り組むべきことはある。けれども、学校での子どもたちの意欲的な鑑賞活動の様子を見ると、そのような困難さは消えてしまい、学校美術館の実践を充実させたいと考えるようになっていく。子どもたちにとって、アーティストにとってもよりよい活動になるように、教育実践を積み重ねることが大切である。

近年、対話型鑑賞法という言葉がしばしば使用される。教師から一方的に作品の説明をするのではなく、対話を通して子どもたちが気づいたことや感想を述べる。「何が描かれていますか」という発問に対して、描かれているものを一つずつ指摘することは大切であるが、作品の内側に秘められた心情まで理解することがある。あるいは、その人なりの印象や感じ方をする場合がある。例えば、北斎の「神奈川沖浪裏」の作品を見て、「音が聞こえる」と述べた子どもがいる。実際には、絵から音が出ることはありえないが、絵の中の波の様子から、波や風の音を感じ取ることができることは、すばらしい感性である。「どんな音が聞こえますか」「どうして音がしますか」という対話をすれば、その子どもの発想が引き出されるはずである。つまり、対話をするためには、作品を深く鑑賞するための手立てや、一人ひとりに応じた言葉がけが必要になってくる。今回、アーティストとして支援下さった方々は、アーティストであるとともに教育者でもある。美術館の教育普及係として鑑賞教室を担当されている方もいる。アーティストによるティーム・ティーチングや、学校の先生方との協力によって、対話型鑑賞法についても理解を深めていきたい。

注

- 1) 辻 泰秀・山本政幸・浅尾知子「地域における『学校美術館』の構想と準備—地域の学校やアーティストや学校との連携—」教師教育研究 第9号 岐阜大学教育学部 2013
- 2) 辻 泰秀・清水英樹・新實広記・林和貴子「地域における『学校美術館』の実践(1) —『学校美術館』の意義と実践事例—」岐阜大学教育学部研究報告 第15巻 2013

付記

本稿のうち、1・2・3・4・6の本文を辻、5のリーフレットの資料作成を水谷が担当した。